

# 沖縄慰霊の日 碓に刻まれた名を思う

沖縄はもう、慰霊の日を迎える。77年前の沖縄戦では、住民を巻き込んだ激しい戦闘があり、多くの命が失われた。

糸満市の「平和の碑」には、国籍や属性を問わず、これまでにわかつた戦没者の名が刻まれている。今年、その全てを読みあげる試みが、市民の呼びかけでオンライン上で行われた。

計24万1632人。未明の2時間ほどの休憩をはさんで連日続けても、11日間かかる。

旧日本軍は沖縄での敗北が決定的になつても、「尺寸の土地の存する限り、戦いを続ける」と、本島南部に司令部を移して抵抗した。このため、先に避難していた住民は戦場のただ中をさよよい」となる。誤った判断が、県民の4人に1人が命を落とす惨禍を招いた。

読みあげが突きづけてくるのは、犠牲者の数の多さだけではない。一人ひとりの存在の重み

だ。読み手の声の向こうで、亡くなつた人の過去、そして戦争がなければ続いていたであろう未来が浮かぶ。

オンラインの画面には、名前とともに、出身地や年齢、死亡推定場所も映し出された。

0歳の乳児がいる。幕末生まれのおばあさんがいる。戦場で散り散りになつたのだろうか、死亡場所が各地に分かれている家族もあれば、一家が全滅してしまう、「〇〇の娘」としか書かれていない人もいる。生まれた証しである名札を奪う。それが戦争の実相だ。

今回の企画には国内外のさまざまな世代が参加した。本島中部にある西原中学校は生徒全員で、地元の6290人を3日間にわたつて読みあげた。

「自分と同じ名の人がいた。」

のか」。ある生徒はそんな感想を述べた。

小さな手がかりから、過去を身近に引き寄せる。自分だったらどうしただろう想像する。

それが戦争の記憶を継承する第一歩だ。忘れない経験になつたのではないか。

沖縄戦の体験者のなかには、77年前の自らに重ね合わせて、ウクライナの状況に心を痛める人が少なくない。

国連人権高等弁務官事務所によると、これまでに4500人を超す民間人の死亡を確認したという。だが、実際はもっと多めにみられる。

ウクライナに限らない。紛争は絶えず、住まいを追われた難民は1億人を超す。その数だけ名前があり、それぞれにかけがえのない暮らしがあった。

6月23日。命の大切さに思いを致し、平和への願いを新たにする日したい。